大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

古代ギリシア初期医学にみる魂と身体の相関性の問題：De victu とプラトン哲学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木原, 志乃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004329

古代ギリシア初期医学にみる魂と身体の相関性の問題
—*De victu* とプラトン哲学

木　原　志　乃

前五世紀以降、コス島を中心に活動したヒッポクラテス派の医学者たちは、「医術」(イーアートリケー・テクネー) の確立を志し、「自然科学」の一領域としての医学の道を開きつつあった。彼らの残した「ヒッポクラテス文書」(*Corpus Hippocraticum*) には、様々な病の観察記録が記されている。そのなかには身体の外傷および養生法や生理学的考察が多くを占めるが、いわゆる「心の病」にあたる症例として、メランコリアー、エピレープシス、ヒュステーリアー、フレニティス、マニアーなどについても言及されており、その症状は意識障害、譫妄、幻覚、多言などがあると報告されている[1]。では彼らが観察し分析を記したところの「身体」と「心、精神、魂」はとどのような相関性のもとで理解されていたのか。そもそも心および魂を意味する当時の用語であるプシューケー概念が形成される背景には、前７世紀以降のソクラテス以前の哲学者たちによる「生ける自然」への問いかけが重要な出発点となっている（以下では「心的活動」を担うものとしてのギリシア語の ἡ ψυχή プシューケーを、「生命原理」などより広い意味を考慮して総じて「魂」と訳す)。タレス以降のミレトス派の自然観を引き継いで、ヘラクレイトスは「魂」(プシューケー) 概念について、物質的な位相における「生命原理」としてその哲学的重要性に注目しながら語った。そしてそれがソクラテスおよびプラトンに至る哲学の領域において「魂＝自己」の問題が中心的課題になるにつれ、身体（ソーマ）と魂（プシューケー）の概念的対立（すなわちその二元性）が明確となっていったのである。このような哲学史上の魂概念の展開を念頭におきながら、まず本稿の第一章では、「ヒッポクラテス文書」において、「魂」について語られた個々の文脈を確認し、身体とどのような関係にあるとみなされたのかを概観するところから始めたい。本稿取り上げたいのは魂概念に関してとりわけ重要なテキス

1　１世紀の医者ケルソスによれば、精神の病 (insania) として、「急性で熱性の譫妄としてギリシア人たちがフレニティスと呼ぶものがある。(中略）また最初は発熱を伴わない慢性の病で、後にやや発熱するものとして、黒胆汁によるメランコリアがある」とされている（*De medicina* III 18)。

ト、ヒッポクラテス文書の『養生法について』(以下で *De victu* と表記)であり、さらにプラトン哲学書『ティマイオス』(以下で *Tim.* と表記)における医学的文脈についてである。*De victu* は魂への言及数が他の文書と比べて際立っており、一方、*Tim.* は当時の医学説を念頭に置きながら自らの哲学をそこに重ねて語っていることは明らかである。そしてこれら二つの文書は非常に密接な関係にあることが様々な点から裏付けられることを本稿第二章で具体的に指摘したい。さらに第三章では、プラトンの *Tim.* で語られた思考の座としての「魂」概念の考察から浮き彫りになった身体との相関性の問題について考察する。一見したところ、身体的なものを否定的に捉え、それから逃れるべきことを主張して「魂」の問題を重視したプラトン哲学の立場と、「身体」の自然本性の観察から始まるヒッポクラテス医学派たちの立場の違いは大きいように捉えられがちであるが、本稿の考察を通して当時の哲学と医学の親近性についても確認したうえで、そこにみられる魂と身体の二元性(dualism)の問題を再検証したい。

第一章「ヒッポクラテス文書」における「魂」(プシューケー)概念

まず、「ヒッポクラテス文書」の概要とそこにおける「魂」への言及数を確認するところから始めたい。そもそも 70 数編から成る「ヒッポクラテス文書」は著者や執筆年代が不確定であり、統一的な理論として概括することは難しいという点は、最初に考慮しておくべきであろう。そのうえで、以下の考察では前４５０年頃から前３５０年頃のコス派を中心とした医学思想に焦点を当て、いくつかの事例を通して、そこに見られる基本的な魂概念と生理学思想との関連を簡単に確認することに努めたい。ヘレニズム期以降のギリシア医学の著作においては、プラトン、アリストテレス、ストア派などの議論を踏まえて「魂」が顕著な概念として言及されているが、「ヒッポクラテス文書」内で「魂」という用語の使用はいまだ多くない。リトレによって編纂されたこの医学文書全体を検証すれば、「魂」に言及した箇所は１００例以上見られる。そのうちで明らかに偽作と思われる書簡集や後の時代のものと推測されるラテン語資料(『七について』)等は除外すれば９０数例が残される[2]。一見して多い使用数にみえるが、ほとんどの医学文書内で魂概念に言及されるのは稀で、個々の文書に用例が点在するのみである。病気や治療に関して、その身体的な機能を説明するのには(あるいは心の病の分析においてさえ)、魂概念を持ち出すまでもなく、体液や湿乾といった性質で十分だったからである。その中で、おそらくソクラテス以前の哲学者たちの魂観を念頭に置きながら、あえてその言葉を頻繁に用いた *De victu* I-IV

2　Kühn u. Fleischer および Maloney, G. u. Frohn, W. 参照。

には注目すべきである。およそ９０の用例のうち６１例という、全体の約七割弱を占め、しかも際立った内実を持つ仕方で魂概念が登場してくる文書である[3]。

6 他のすべて―人間の魂も、それと同様に身体も―は秩序付けられている。人間へ、部分の部分、全体の全体が入り込む。それは火と水が混合したものである。…それぞれの魂は大きい部分と小さい部分を持っておりそれ自体の持つ部分を巡っている。…人間の魂は人間の中で成長するが、それ以外のものの中では成長しないのである。

10･･･ さらに、最も熱くて最も強力な火は、目によっても触れることによっても感知できないもので、自然本性に従ってすべてのものを支配し、あらゆるものを秩序付ける。その内には魂、知性、思慮、増大、運動、減少、分離、睡眠、覚醒がある。それは片時も休息することなく、こちらのものどもも、あちらのものどもも、すべてを常に統括する。

21 彫刻家たちは魂なしの身体を模倣するのであり、思慮あるものを作るのではない。彼らは湿ったものを乾燥させ、乾燥したものを湿らせながら、水と土から作るのである。

De victu 第一巻冒頭では養生法を正しく書き記すための前置きがなされ、病気を予見することの重要性について説かれる。そしてその後に展開される人間身体の本性を説明する際の自然学的基礎理論（第３―１０章、第２５章―３６章）でとりわけ魂への言及数が増える。この部分は著作全体において、技術に関する模倣説（第１１－２４章）の前後で展開されるもので、宇宙論的な文脈がしばしば挿入されながらも、全体の基調をなす重要な議論を構成している。強調点は一貫して健康と病に関する「釣り合い」の認識の必要性についてであり、身体的釣り合いは火と水の相互変化から成立していることが、魂の働きとして何度も繰り返し語られているのである。そこにおいては、魂はすべての身体的部分に入り込み、一定の比率によって調和することでそのそれぞれの部分が生き、そして増大すると繰り返し述べられる。すなわち魂は、「部分」(μέρεα, μόρια) を持ち、成長するものとして特徴付けられているのである。

ここで語られた魂と身体の関係については、これまでの研究者たちの解釈は大きく二つに分かれる。魂と身体の双方がまったく対立的な二元論的関係にあるとする立場[4]と、双方が切り離すことのできない反二元論的関係にあるとする立場[5]である。正反対の解釈が

3　*De victu* I-IV のうち、IV は『夢について』という独立した著作であるという指摘もこれまでに少なからず見られたが、近年の研究者たちは I-III と IV の用語や思想上の連続性をみるべきとしており、本稿でもそれに従いたい。Cf. Diller, 39ff.; Eijk, 2004; 2011, 255ff.

4　Gallop, 13n25; Dodds, 119 .

5　Hankinson, 200-6; Gundert, 22-5

なされていることはわれわれに困惑を引き起こしがちだが、まずここで使用する「二元論」という用語の意味を確認する必要がある[6]。通常、この時代の魂についての文脈で「二元論」という用語を用いる際、オルペウス－ピュタゴラス派的な魂の説明が念頭に置かれ、おそらくプラトンの『パイドン』もまたそれから影響を受けたとされる輪廻転生の主体である魂とそこから切り離される身体という図式が想定されて理解されている。すなわちそのような影響関係をある程度考慮し、魂と身体の対立的分離的関係が際立たされているとするのが二元性を強調する立場なのである。*De victu* でも宇宙論的次元から議論展開される際に身体と魂は別の位相のものとして「魂が身体に入る」とされているのであれば、これは確かに輪廻転生を前提した表現にみえる。しかし、*De victu* 第一巻の主題は生ける身体内部での成長増大等の変化がいかに釣り合っているかの説明であり、輪廻転生の教義とは区別すべきである。H. Bartoš も指摘する通り、著作全体においてもピュタゴラス派的な（あるいはプラトンが『パイドン』で神話として示したような）冥界からの魂の生まれ変わり、および身体からの分離を重視して自説に受容していたとは思われない。個々の箇所で表現上のピュタゴラス派との類似性をある程度考慮したとしても、*De victu* での魂と身体の関係は、少なくとも死後に魂が身体を分離するといった意味での単純な二元論と受け取るべきではないであろう。

> 25ff. 人間の魂はすでに述べたように、火と水が混合している。それは人間の諸部分、すなわち生きていて呼吸しているすべてのところに入り込むが、…男の質のものも女の質のものも、…魂はあらゆる生き物において同一であるのに対して、身体はそれぞれに異なっている。…

この個所において、物質的変化のもとで語られた「魂」は、ピュタゴラス派というよりも、ポストイオニア自然哲学の生物学的考察に影響を受けていることに注目する必要があるだろう。たとえば火と水の相互作用や火の秩序付けという点ではヘラクレイトスの魂観との共通性が確認できよう。ヘラクレイトスもまた魂を「蒸発気」としても、さらに「常に生きている火」という表現で生理学的に語ってもいる（この点については拙著を参照）。また人間の部分であるとともに全体であるものとして語られている「魂」は、アナクサゴラスないし、デモクリトスの「種子」(ゴネー) との共通性も重要で、「種子／精液」のように、ある意味で「部分」として生命体内部にあり、それ自体が人間全体の成長や身体の形成に関与するものが魂であると解すべきである。「部分」という表現も、全体でありかつ部分であるというアナクサゴラス的な同質素を想定するならば、理解が容易になる。すなわち

6　また、この文書が二元論だとする見解の中には、火と水の二元論（Jones, xlii n3 ）への参照があり、それが混乱の要因にもなっていると指摘される。Cf. Bartoš, 2.

どこまでもそれ独自で独立に存在するものとしては捉えられず、すべての部分が混在する中で全体が構成されている。その有機的生命体こそが人間の身体であり魂であるという見解である。

さらに *De victu* での「魂」は、身体的な生理学変化にとどまらない局面も含んでおり、たとえば第一巻第３５章では火と水を基調に置きながらもメンタルな機能を備えた概念として用いられている。すなわちこの論考の著者はこのような知性的な生命原理にも「魂」という語をあて、「魂」に高次の精神活動を付与している。

> 35 魂の聡明、および不聡明と呼ばれている状態については、以下のとおりである。最も湿性の火と最も乾性の水が混ざり合っていると最も聡明になる。…水が火にさらによく支配されると、そのような魂は鋭敏になり過ぎて、そういう人は必ず夢を見る。彼は「半狂乱な人々」と言われる。
>
> 61 魂が見る対象に注意を向けると、魂は動いて熱くなる。…魂は動くと熱くなって乾き、湿性分を消耗する。

また、他のヒポクラテス文書に関しても、たとえば『肉質について』(*De carnibus*) でも *De victu* と同様の魂概念と生理学との繋がりおよびメンタルな機能との繋がりを見てとることができる。

> 『肉質について』1　私がこれから説明するのは。人間やその他の動物がいかにして生じたか、また魂とは何か、健康や病気とは何か、人間にとって善いものと悪いものとは何か、人間が死ぬのはどんな原因によるのかという点である。

この著作冒頭で言及された「人間がいかにして生じたか」および「魂とは何か」の課題は、その後の記述の第３－１４章で「いかに生じたか」の点を説明している。すなわち人間身体の形成論を語り、不死なる熱とともに、空気や冷たいものによって脂肪部分が形成され、他のさまざまな臓器が形成されるプロセスが説明される。そしてその後、第二の出発点となっている第１５－１８章では感覚知覚論が述べられ、「魂」という言葉は出てはこないが、著作冒頭で宣言された「魂とは何か」に対応する議論が進められているのである。その内容は熱と作用による生理学基礎理論とそれに基づいた知覚・認識論であり、*De victu* の魂観との共通性を見ることができよう。

また、以下の文書でも、身体の熱や湿の作用との関係のもとで魂の生理学が語られ、「思慮」はその身体的作用によって機能することが示唆されている。

> 『流行病』(*Epidemiae*) VI 2　　人間の魂は死ぬまでつねに成長している。病にかかったとたんに魂も焼けつくと、体は消耗する。5　…気質がもとになっている症状として次のことがあげられる。激怒すると心臓と肺が縮み、熱と湿気が頭へのぼる。陽気

にふるまえば心臓は広がる。労働は四肢や肉質を養う糧であり、睡眠は内臓を養う糧である。魂を働かせることは、人間の場合、思慮深くすることに他ならない。

「夢」が主題である *De victu* 第四巻では、睡眠について説明する際に、「魂」という言葉が語られている。第四巻８６章で睡眠時に「それ自身で身体と独立して活動する」と特徴付けされている魂概念は、魂の生理学的変化を強調した *De victu* 第一巻と異質と捉えられがちである。しかし夢を見ることで身体状態以上の精神活動がそこに見られる故の表現であろう[7]。また、以下の用例のように、酩酊状態になり知性が低下することを説明するテキストにも、魂という言葉を用いてその変化が語られている。

『体内風気について』(*De flatibus*)14　酩酊しているときには、血液が急により多くなり、魂と魂の中の思想とが変化して…

さらに以下のように、総じて、魂と身体は併記されることが多く、様々な病の考察の中で、人間全体がいかなる影響を及ぼされるかについて語る際に、身体と魂が対となって言及がなされているのであろう。

『空気・水・場所について』(*De aere, aquis et locis*)19-23　スキュティア人は…苦労せずに暮らしている。激しい変化がないところでは、身体においても魂においても苦痛とは無縁である。……魂がすっかり隷属状態になると…無鉄砲に危険を冒す気にはなれないが…

『疾患について』(*De affectionibus*)46　病人の身体と魂の状態を…

以上に見た「ヒッポクラテス文書」内での主たる魂概念を概観すれば、身体との相関性を意識して熱や火による生理学的状態によって作用を被るものとして語られていることがまずは確認できよう。そして身体全体として作用を被るもの、及ぼすものが魂であり、さらに、部分であり全体でありながら生ける身体の成長・形成を促すものが「魂」として特徴付けられてきたのである。このような魂理解は、Van der Eijk が疑問を呈したような反二元論、すなわち魂と身体（および物質）のカテゴリーを区別せず素朴に同定したということでもない。そこには、感覚知覚、知性などの心的活動も加わり、統一的視点としての自己、主体としての魂理解への道筋が開かれているともいえよう。

このような魂観は、既に見たように、初期の自然哲学者たちの魂観と共通の思想的基盤に立っていることが伺える。これまでにも指摘されてきたように、初期自然哲学者たちが語った「魂」を総括すれば、そこに「動」「知性」「非物体性」の三点が基本的特性として

7　IV, ch.86 および I.ch35-6 の魂についての議論の連続性については、稿を改めたい。とりわけ Eijk,2004;2011 の議論を参照のこと。

あげられよう[8]。そもそもホメロスの時代には、「魂」は「生命原理」や「心」を表す概念として用いられるものではなく、ただ人間が死に行く際に身体から離れさる幻影のようなものに過ぎなかったことはしばしば指摘されてきた。死において身体から出てゆく何らかの物質、そして冥界に漂う不明瞭な靄としての空気、そのような位置づけであった魂は、やがて生命そのものに不可欠の「息」として、一方でオルペウス - ピュタゴラス派的宗教観へと結びつき、他方ミレトス派の自然哲学の系譜においては生物の呼吸作用と密接に結びつき、生きた身体の生命原理として理解されるようになったのである（後者の伝統的理解にも合致する空気＝魂説を主張していたのは、哲学者アナクシメネスやアポロニアのディオゲネスである）。これに対して、ヒッポクラテス文書での魂理解は、既に見たように、死の場面で体内から分離するものとみなされてはいない。すなわち身体的な基盤に基づいた場面で「魂」概念を語りながらも、単なる物質とは区別される生命活動、あるいは最も非物質的な生命活動をも担いうるのが「魂」であるという認識のもとで語られているのである。

しかし一方で、ヒッポクラテス文書の著者が、魂概念についての当時の哲学的見解を批判している点は重要である。ヒッポクラテス文書においては技術知の自立が幾度も強調され、自らの医学的方法論を哲学者たちの語りと区別すべきであるとも述べられた。たとえば『古来の医術について』では、初期ギリシア哲学者エンペドクレスの名が挙げられて、哲学の非経験主義的側面が医学の立場から批判されたことはよく知られている[9]。また『人間の自然本性について』（*De natura hominis*）ではおそらく哲学者たちの見解を念頭に置いて、魂を一つの物質的要素として位置づけることをはっきりと退けているのである。エンペドクレスやアナクシメネスおよびディオゲネスの見解を念頭に置き、魂は血液や空気などの一つの物質に限定されるものではなく、様々な体液の混合こそが魂であり身体そのもののあり方であるというのである。

> 『人間の自然本性について』6　人間が単一の物であると主張する人たちは…人間が血液であると明言する人たちも同じ論拠に拠っている。喉を切られ血が体から流れ出るのを見て、彼らは人間にとって魂とはまさにこれであると考える。

この文書ではいわゆる四体液説の立場から、すなわち血液 (ハイマ)・粘液 (プレグマ)・黄胆汁 (クサンテー・コレー)・黒胆汁 (メライナ・コレー) という体内の基本的な四つの体液の混合状態によって健康が決定されるとする見解を著者はとる。他の医学文書を含めヒッポクラテス医学の基調に置かれた様々な体液説においては、身体内のそれらのバラン

8　藤澤参照。
9　『古来の医術について』(*De prisca medicina*)20 参照。

スや混合状態（クラーシス）が健康を説明するための鍵であった。このクラーシスに基づいた身体観が後２世紀のガレノスの時代までに体系的に理論化されたのが「四体液説」である（ヒッポクラテス文書中で四体液の全容が示されているのは、前 400 年頃のヒッポクラテスの女婿ポリュボスの著作と見なされている『人間の自然本性について』のみである）。人間は体液の混合であり、諸体液によって身体全体の調和が成り立ち、「魂」とはまさにその場面において語られるべきであると著者は主張するのである。

以上、ヒッポクラテス医学文書内で、「生きる」「成長する」「思惟する」といった活動を担う「魂」概念と、それがどのような身体的基盤のもとで語られたかについて概観した。体液の常なる流れの中で、身体を全体から統一的に捉えた際の生命原理が魂であった。少なくともヒッポクラテス派の医学者たちにとって、魂は素朴に身体と独立的関係にある不明瞭な実体でも、外部から突然入り込んでくる特殊な実体でもなく、魂は身体という物質基盤のなかにある生ける身体そのものを際立たせる文脈で語られていることがいくつかのテキストから確認できた。また、魂のさらなる重要な現われとしての知覚認識機能はその生ける身体を土台とする統一的自己においてのみ現われるという点を見過ごすべきではない。当時の哲学と医学は相互に影響を被りつつも緊張関係の中にあり、ヒッポクラテス文書の著者たちは、哲学の思弁的側面の批判を通して、身体の有機的統一性として魂を把握する視点を示したのである。

第二章　プラトン『ティマイオス』における医学的見解：「魂の回転」

次に、以上で見てきた医学者たちの魂理解を、プラトンのテキストと比較したい。プラトンは初期から中期にかけての対話篇において、「魂」を配慮することの重要性について言及し、とりわけ「よく生きる」ための倫理的主体となるものを魂として語った。そこでは、概ね倫理的認識論的な探求が主題であるのに対して、後期対話篇の一つ *Tim.* では依然として同じ問題意識を継承発展させつつ、自然学的・宇宙論的視野の中でわれわれ人間の心身の本性が論じられ、当時の医学的背景との関連で重要なテキストとなっている[10]。

プラトンは *Tim.* において、身体のメカニカルな構造、病の原因としての身体、さらには魂と身体の関係について丁寧に考察している。それは著作前半部で語られる宇宙形成の話、および実在と生成への問いかけという根本問題と密接に関係した仕方で語られている。まず冒頭において、言葉で描いた「よき国家」が実際に動くところを見たいというソ

10　プラトンが『饗宴』において描く医者エリュクシマコスの演説にも、当時の医学的背景がしっかりと示されている。これについては拙著を参照されたい。

クラテスの発言から議論をはじめている。そしてそのリアリティが問題となるアトランティス伝説をクリティアスが皆に語り聞かせた上で、自然学者ティマイオスは万物の自然本性について話すように促され長い説明へと移る。ティマイオスによる議論の運びは以下の通りである。まず第一部では、神（製作者）による宇宙の生成過程が理性による所産として語られ（27C － 47E）、第二部ではわれわれの目にする物体特有のメカニカルな作用について、それが必然による所産として語られる。いわゆる四要素が四種の正多面体およびそれらを構成する「要素三角形」に形象化されて、独自の「アトミズム」が提示されるのは、この箇所においてである（47E-69A）。さらに第三部では理性と必然との共同作業の所産として身体の生理学的作用と健康および病について語られる（69A-92C）。心臓や肺や胃腸、骨、肉などの生理学的説明を終えると、身体の病について語り（81Eff.）、最後に魂の病について語り、対話を終える（87Bff.）。

当時の医学文書との関係でとりわけ重要なのは、第三部の人間身体の生理学および病の分析の箇所である。身体の病気がなぜ生じるのかについて *Tim.* では以下のように語られる。

> 81Eff. 身体を組み立てているものには、四種のもの、つまり土、火、水、空気があるのですから、それらが、不自然に過多になったり、不足したり、また本来の自分自身の場所から、よそへ場所を移したり、さらに、―火にしても、その他のものにしても、（中略）こうしたことが、内部の不和や病気をもたらすのです。というのは、自然に反して、それぞれのものが生じたり、また場所を変えたりすると、（中略）ありとあらゆる仕方で、あらゆる変化を、これらのものが受けるからです。というのは、われわれの主張では、同じものが同じものに、同じ仕方で恒常不変に、また一定の比率に従って、付け加わったり、除去されたりする場合により、ものは自己同一を保ち、無事息災で健康なままでいられるのです。

ここでプラトンは、当時よく知られていた医学説の主張を基調に置いて議論展開していると指摘されてきた。まず注目するべき点は、医学説の語りに政治的用語が採用されていることである。アルクマイオン以来、健康と病は身体内の「均衡」として捉えられ、「平等」（イソノミアー）という政治学用語がその説明に用いられてきた。プラトンも同様に、「内部不和」（スタセイス）などの政治用語を用いてバランスの欠如を説明する。そしてこのような「平等」や「釣り合い」が強調されている点を含め、*Tim.* 第三部の個々の生理学的説明の多くには、ヒッポクラテス文書との共通性が見られる。

しかしながらプラトンはこの箇所で四体液説と四元素説を混在させて議論を展開しているように見える点がしばしば指摘されてきた。この見解をめぐって、プラトンの立場が

いかなるものであったか論争となっている。たとえばヒッポクラテスの立場を擁護する2世紀のガレノスは、プラトン *Tim.* の基調にあるのはヒッポクラテス文書『人間の自然本性について』で主張されたのと同様の四体液説であるはずなのに、82A で要素説を重視してしまったのは、宇宙論の考察以降で登場する四元素の説明に引きずられたプラトンによる誤りであると指摘している。あるいは語り手ティマイオスは南イタリアのロクリス出身というプラトンの想定であり、ロクリスのピリスティオンおよびシケリア医学派やエンペドクレスの四元素説の影響を強調する研究も多く見られる。だが、おそらくそこにシケリア医学のストイケイアを強調し過ぎることはプラトンの医学説の基調を損ねることになるであろうし、この箇所でプラトンは混乱したわけではもちろんない。病を健康にもたらすことにおいて重要なポイントは、身体を構成するものが四元素か四体液かではない。物質的基盤としての四体液と四要素のどちらに関しても、その「物的次元」がどうあるかの問いは既に第二部で提起されている。そしてここでは「釣り合い」（シュンメトリア）の保持、および身体の常なる変化における同一性の教義への認識が強調されているのだからである。そしてそれに続く箇所では、「魂」も「身体」も病を被るゆえ、それらにおいて「釣り合い」を保持するために運動訓練しなければならいことが説明され、そして最後にすべての病を、「養生法によって教導しなければならない」(89D) と結論づけられている。

> 88B 身体と魂の両方の病気に対して、安全を守る方法はただ一つです。すなわち身体を伴わないで魂だけを動かすことも、魂を伴わないで身体だけを動かすことも、どちらもしないということでして、それはつまり双方が互いに自分を防御して、相互に均衡を保ち、健康なものになるようにというためなのです。

ここで重要なのは、われわれにとって「身体内の釣り合い」および「魂内の釣り合い」だけでなく、それに加えて「身体と魂の間の釣り合い」も必要とされることがプラトンによって示されている点である（87D）。では、*Tim.* で語られる「身体と魂の間の釣り合い」とは何か。身体と魂の関係性について、以下にいくつかの手がかりを示したい。まず *Tim.* では宇宙の生成に関して、魂は身体のすみずみにまで行きわたり浸透していて、両者は事実上一体的なあり方をするものとして捉えられてもいる。

> 34B 宇宙の魂の真ん中へと魂を入れて、これを全体を通じて延ばし拡げ、さらに外側から身体を魂によって包んだ。
>
> 36DE 身体的なものの全体を魂の内部に組み入れて、両者の中心と中心を合わせて適合させていった。そして魂は宇宙の身体の真ん中からいちばん外側の端に至るまで、いたるところに織り込まれた。

また、*Tim.* 第一部から二部にかけて、宇宙がよき秩序に向けて目的論的に生成された

のと同様に、人間身体も生成されると説明されるが、しかしその作り手は異なり、神であるデーミウールゴス (製作者) により宇宙が製作されたのに対して、人間の身体の製作はより劣った神性をもつ神々（天体）に仕事が任されている。また、神は宇宙以前の秩序のない混沌から秩序を作り出すことを目的とする一方で、人間身体は神であるデーミウールゴスによって作られた「理性的魂」の乗り物として、また魂を保護するものとして製作されている。人間身体はあくまでもわれわれの生を支える基盤としてその重要性は前提されながら、それはある意味では魂や理性に導かれた善き秩序を乱す原因でもあるとみなされる。それゆえプラトンにとって、魂の不釣り合いは人間身体の不釣り合いによって引き起こされるもので、人間身体と無関係に生じる魂の病については触れられていないのである。

本稿ではこのような、神である製作者の問題、および宇宙の身体と宇宙の魂の製作の問題などを含めて、*Tim.* における魂と身体の関係性の議論そのものを詳細に取り上げることはできない。ただ、ここでいくつかの手がかりとなることがらに目を向けながら確認しておきたかったのは、魂と身体の一体的あり方、そして「魂の世話」にとって身体的要因が一方的に軽視されてはおらず、さらに身体および魂の釣り合いを保持することの重要性が *Tim.* で説かれている点である。すなわち魂も身体も「運動」を通して養生法を実践し、釣り合いを構築する必要があるとされているのである。そしてそれらの点は *De victu* の議論の根幹に置かれていた主張でもある。

そこで *Tim.* と *De victu* の親近性に注目するならば、J.Jouanna も強調しているように[11]、魂の運動、およびそれと結びつく感覚知覚の議論はきわめて重要であろう。知覚の生理学的説明については、たとえば脳や血液の重要性を説いたアルクマイオンやエンペドクレス（断片１０５）の教説が前提されているともいえようが、*Tim.* ではそのような生理学の説明よりも複雑な捉え方をしている。そして鍵になるのは、「回転運動」という用語である。回転、循環、軌道等と訳されるこの言葉は、*De victu* では、頻繁にみられる用語で、宇宙の回転として２回用いられ、それと対比的に出てくる身体内の循環および回転として１５回用いられているのである (Cf.chs.9, 10, 19, 35, 66, 71, 76, 89, 90, 93)。ヒッポクラテス文書内では約７０カ所の言及数であるが、「魂」の運動としては *De victu* のみであり、さらに感覚知覚や思惟活動との連動性も重要である。

一方プラトンにおいては、偽作を除く全著作で４０カ所の使用例のうち、２４カ所が *Tim.* に集中し、「魂の回転運動」については *Tim.* でのみ言及されている（34A6, 38C8,

11　Jouanna, 203ff.

39B5, C2,5, 42C5, 43A5, D2, 44B2, A4, D3, 47A5, B7, D3, 58A5, 76A7, 83A2, 85A6, 86A7, 90D2, 91E5)。*De victu* および *Tim.* の双方ともに、回転や循環運動を ἐν κύκλῳ κιήνησις や περιφορή といった類似した用語で補いながら、医学的考察の場面で魂の動きとしての「回転」を重視し、そこに生理学および知性や感覚の議論を重ねている点は、両著作を繋ぐ重要な共通性であり、J.Jouanna もこの点を一貫して強調して論じている。

一例として以下のテキストを比較されたい。

> *De victu*35　最も湿性の火と最も乾性の水が体内で混ざり合っていると最も聡明になる。（中略）　火の威力が水よりも劣っていると、必ずその魂はのろい傾向にあり、このような人は愚鈍と呼ばれる。なぜなら、循環（περίοδος）がのろいために、わずかしか混ざり合わないからである。実際、魂の感覚（αἱ　αἰσθήσιες τῆς ψυχῆς）は、視覚や聴覚によるものは鋭いのに対し、触覚によるものは、のろいけれども感じるのは容易であって、こういう人たちも、冷や温などのような触覚は他の人たちに劣らず感じる。（中略）適切な摂生法をとれば彼らもよくなるであろう。（中略）というのは、身体が健康な状態にあってどんなものによっても調子を狂わされていなければ、その魂の混和状態は、聡明さを示すものだからである（19 章および 71 章 7 行目参照 ）。
>
> *Tim.*43C そしてとりわけ、今お話ししているこの場合には、そのような動きは、絶え間なく流れている、かの水路（養分の流れ）と一緒になって、魂の循環運動（あるいは軌道）を激しくゆさぶったりして当面のところでは最も広範囲にわたる、最も強力な動きをもたらしたのでして、そしてそれらすべてのものが原因となって、そのいろいろの動きが身体を通り抜けて魂にぶつかるという場合がそれなのです。そして、このような動きこそ、いま言ったような理由からして、後に一括して「感覚」と呼ばれることになったのですし、またいまもなおそのように呼ばれているというわけなのです。

両テキストにおいて宇宙と人間はその生成のあり方において対比的され、そこで魂の回転軌道がしばしば語られる。用語の選択、使用数からしても両テキストの類似性は顕著である。*De victu* の執筆年代は確定が難しく、*Tim.* とどちらが先に書かれたかについては、議論の余地が残されている。おそらくは前４世紀初期に *De victu* が執筆され、前３６０年頃に執筆された *Tim.* がそこから影響を受けたと想定することは不可能ではないであろうし、あるいは双方のテキストに共通する何らかの原型となる医学文書があったとも想定されよう。いずれにせよプラトンは *De victu* での魂概念と非常に共通したしかたで当時の医学者の見解を再構成しようとしていたはずである。

第三章　理性の座と魂：知性活動の逸脱原因論

では、「理性的魂の座」は、魂と身体の相関関係にどのような問題を生むのか。プラトン哲学においてもヒッポクラテス医学文書においても、理性の座が脳（頭部）に置かれ、その機能の重要性がしっかりと認識されていた。ガレノスに至るまでの時代に、明確にこうした立場をとったのは、その両者だけであった。*Tim.* では、神は世界の魂を模倣して人間の理性的魂を作り、その際に宇宙の丸い形が人間の頭に投影され、頭に奉仕するものとして身体が結びつけられたと語られている。そして崇高なものとしての思考の動き（89B）、頭の中の回転軌道（91E）の重要性は繰り返し強調される。

> *Tim.*44D さて、神々は、二つあるこの神的な循環運動（同と異）を、万有の形が丸いのにならって、球形をした身体に結びつけました。これこそわれわれがいま「頭」と名付けているところのものでして、最も神的なものであり、またわれわれのうちのいっさいのものに君臨するところのものなのです。

プラトンにとって魂の病の原因は、この身体器官としての脳における回転運動が正しい軌道から逸脱することであった。当時の医学的言説を背景において、魂の病の典型であった「癲癇」について、プラトンは以下のように語っている。

> 82E-85B 肉のうちでも古い部分が溶け出せば黒色や草色の体液が生じ、･･･ 若くてやわらかい肉が解けると、空気を含んだ泡が生じます。全体をみれば白い粘液です。この白い粘液が体の中にたまると、泡に含まれている息のために危険なものになります。この白い粘液が黒胆汁と混じって、最も神聖である頭の中の循環運動の上に撒き散らされ、混乱を招くならば、いわゆる癲癇が生じます。
>
> 86E-87A すなわち酸っぱい粘液や塩辛い粘液、あるいは苦くて胆汁質である体液が、身体中を彷徨った挙句、外へ出るはけ口が得られなくて、内部に閉じ込められ、自分の出す蒸気を魂の運行に混じらせることによって、自分がこの運行に混じる、というような場合には、いつでもそれは魂のありとあらゆる病気、重症なもの、軽症なもの、小範囲のもの、広範囲のもの、をその中に作り出すのです。そして、それは魂の、かの三つの場所に向かって行っては、その各々が攻撃を加える場所に応じて、ありとあらゆる種類の（中略）多種多様なものを生み出すのです。

身体器官としての脳の重要性を自覚しつつも、その基本にある生理学をプラトンは体液の正常な回転運動の逸脱としていることは、ヒッポクラテス文書における考察とも一致している。このプラトンの見解と同様に、ヒッポクラテス派においても、衝動的な心的状態を引き起こす原因も神経系統の逸脱の原因も、身体内部の体液の不混合、そしてその不調

和によって生じる「体液の移動」に帰されているのだと推測される。

『箴言』(*Aphorismoi*)VI,56 黒胆汁性の病気の場合、その体液の移動は、脳卒中、麻痺、狂気、失明などの病気を引き起こす危険がある。

また、『神聖な病について』(*De morbo sacro*)では、癲癇は神的な何かが原因となって起こるのではなく、その病因は体液の生理学によって説明されるべきものであり、脳から冷たい粘液が過剰に分泌されることで脈管が満たされて通路が塞がれたときに、癲癇の発作が起きるとされている。すなわち、古来精神活動と結び付けられてきた「空気」が、粘液による脈管の遮断によってその流れが閉ざされると、それによって発作が生じ、しばらく経過して粘液が血液と混ざり合い、空気が入ってくることによって発作が終了するとみなされているのである。プラトンにおいて黒胆汁と粘液の両方の働きが癲癇の原因とみなされているのと同様に、ここでも空気の遮断の原因は、黒胆汁と粘液による同一の生理学的作用が想定されてもよいであろう。すなわち根本的な原因は脳と空気の関係にあり、それぞれの体液がその空気の移動に関与しているとするべきであろう。

ヒッポクラテス文書の『神聖な病について』では、とりわけ脳の重要性のみが強調され、心的現象の全ての源が脳であるとしているかのように理解される場合があるが、議論の流れはむしろ別の点を強調している。「神聖」と称されてきたこの病が、脳からの粘液の流出によるものであるという主張を前半部分で強調したのちに、１４章以下では心的活動について以下のように分析する。

『神聖な病について』14 われわれの快楽も喜びも笑いも戯れも、また苦しみも悲しみも不安も泣くことも、脳以外のどこからも生じてこないということを知らねばならない。われわれはとりわけ脳によって思考したり理解したり見聞きしたり…。同じこの脳によってまたわれわれは狂ったり錯乱したり…。

一つの器官である脳にその原因が帰されているのではなく、議論の前後の流れの中で「脳の異常は粘液と胆汁による」という体液説が前提となっているのである。脳という一つの身体部分における体液の、あるいはプネウマの流れを通して「思慮」（プロネーシス）が生成されることによってはじめて正しく機能することが可能となるのだからである。そして１６章では全身におけるプネウマの浸透と全身におけるプロネーシスの生成が前提であることが示されてもいる。もちろん空気およびプネウマに内在するプロネーシスの認識能力に関してはそれ以上のことが語られていない。しかし、身体内の体液の釣り合いによって心身の状態を考えようとするヒッポクラテス医学の基本的見解から逸脱せずに精神の病について語ろうとしているのは明らかである。そして第１７章では脳は意識主体（シュネシス）への媒介者であると述べられ、心的機能を「一つにまとめ上げる」（シュニエナイ）

のはわれわれ意識主体であり、脳ではないことが明確に示されている[12]。このシュネシスは、すでに見たヒッポクラテス派の四体液説に基づいた「魂」概念に重なる何らかの「自己」が想定されていると言えよう。

多くのヒッポクラテス文書のうちでも本稿では基本的な文書のみの考察にとどめるが、最も明確に脳という器官を重視しているこの文書においても、そこで心の病の原因とみなされているのは、身体の全体論的な流れの阻害であった。そしてプラトンが知性の座として脳を位置づけていることに関しても、心の病の分析においても、このヒッポクラテス派と共通の思想的基盤を確認することができるのである。すなわち両著作のどちらにおいても、体液論に基づいて全体論的な視点を前提にした議論を展開しており、魂としての何らかの統括的主体は決して身体の一器官に限定されてはいないということである。

おわりに

以上でみてきたように、脳の機能および身体内の体液の流れ、そして「魂」の回転運動、これらが結びついたかたちでヒッポクラテス派にとっての心の病が説明され、身体と魂の相関性の議論が形成されている。そしておそらくプラトンは *De victu* を中心に、その他の医学文書を包括するようなヒッポクラテス派の主張の全体を丁寧に汲みとり、さらにそこに魂についての哲学的議論を展開したのではないか。健康になるために様々な釣り合いをとることが重要であり、かつそのよき釣り合いの認識の必要性を、「よく生きる」ための自己自身の生の吟味の問題として踏み込んでいるからである。すなわち魂の病を癒すためには、われわれの身体を配慮し、さらにそこに成立するわれわれ自身を善へと導く魂の理性的部分を働かせねばならないということである。そこにおいてプラトンはそのような健康と病の状態を、初期の医学において語られたような力の均衡および不均衡のみによってとらえていない。理性的魂によって身体を、あるいは欲望的魂および気概的魂を統括するという構造的視点を導入しながら、「何が善いのか」の指針を高次元から探求し続ける主体が想定されているのだからである。

一般に、プラトン哲学においては哲学的な真理の探究にとっては身体的なものからできるだけ遠ざかり、魂のみに結集することこそが大切なのだという点が多くの対話篇で強調されていた（「魂が身体のあらゆるところから自己自身へと凝集し、結集するように習慣づける」『パイドン』67C）。しかし、プラトンは「子供の時から、生涯を通じて、体育によっ

12　今井論文参照。

て育まれなければならない」という教育理念を示し（『国家』III403C）、しかも身体を訓練する体育は、魂の学びのためであるとも語っている（「そもそも音楽文芸と体育による教育ということを設定した人々も、ある人々がそう思っているように、体育によって身体を世話し、他方音楽文芸によって魂を世話するという、そういう目的で設定したのではない。おそらく音楽文芸も体育も両方とも、魂のことを最も重要な目的として設定したのである。」410BCff.;Cf.『カルミデス』156C-157A;『法律』II653D-654A; 672E-673A）。これらの点は本稿で確認したように、プラトンによるヒッポクラテス医学説の受容内容とも合致する。すなわち、身体の自然本性を全体論的視点から理解し、その善き秩序を把握することは、プラトンにとって、最終的には魂の理性的部分が善を探求することにも重なりうるのだからである。

（引用の訳文は、大槻真一郎編 / 監訳『ヒッポクラテス全集』エンタープライズ社 , 1997 および種山恭子訳 , プラトン『ティマイオス』岩波書店 , 1975 に基づき、必要に応じて適宜変更した箇所がある。）

文献

Bartoš, H., “Soul, seed and palingenesis in the Hippocratic *de Victu*”, *Apeiron* 42-1, 2009

Diller, H., “Der innere Zusammenhang der hippokratischen Schrift *de victu*”,*Hermes* 87-1, 1959.

Dodds, E. R., *The Greeks and the Irrational*, University of California Press, 1951.

Eijk, P. van der, “Divination, prognosis, and prophylaxis: the Hippocratic work ‘On Dreams’ (*De victu* 4) and its Near Eastern background”, in: H. F. J. Horstmanshoff, M. Stol (eds.), *Magic and Rationality in Ancient Near Eastern and Graeco-Roman Medicine*, Brill, 2004.

Eijk, P. van der, “Modes and degrees of soul-body relationship in *On Regimen*”, in: L. Perilli (ed.), *Officina Hippocratica*, De Gruyter, 2011.

Gallop, D., *Aristotle. On Sleep and Dreams*. Broadview Press, 1990.

Gundert, B., “Soma and Psyche in Hippocratic Medicine,” in J. P. Wright and P. Potter (eds.), *Psyche and Soma. Physicians and Metaphysicians on the Mind – Body Problem from Antiquity to Enlightenment*, Clarendon Press, 2000.

Hankinson, R. J., “Greek Medical Models of Mind”, In S. Everson, (ed.), *Psychology. Companions to Ancient Thought* 2, Cambridge University Press, 1991.

Jouanna, J., *Greek Medicine from Hippocrates to Galen*, Brill, 2012.

Kühn, J.- H. u. Fleischer, U., *Index Hippocraticus*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1986–1989.

Maloney, G. u. Frohn, (eds.), *Concordantia in Corpus Hippocraticum*, Olms-Weidmann, 1986-1989.

Temkin, O., *The Falling Sickness : a History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology*, 2nd ed., rev. Johns Hopkins University Press, 1971.

今井正浩「医学から心身の科学へ――ヒポクラテス『神聖病』第 14-17 節の解釈を中心に」「人文社会論叢 . 人文科学篇」7, 弘前大学人文学部 , 2002.

木原志乃『流転のロゴス』昭和堂 , 2010.

藤澤令夫「知るもの、生きるもの、動くもの」『藤澤令夫著作集』II, 岩波書店 , 2000.